

今夜は中秋。妻籠(つまご)の宿場は、南木曾(なぎぞ)の山の端をなぞるように昇った月の光を浴びて昼間のように明るい。

旅籠の黄ばんだ障子でさえ、灯を入れた行燈よりなお明るく、ミチは誘われるように障子を曳き月の明かりを部屋に呼び込んだ。

くつきりと澄み渡った空に、清明な望月が静かにミチを見下ろしていた。

十三峠でミチを散々苦しめた咳は、今はすっかり落ち着いている。

炭焼きの老人にもらった芋飴が効いたのか暫くは楽に歩けたが、大井の宿場が近づく頃から再び咳き込み始めた。

ふらつく足元をこらえ、造り酒屋江成屋の店先に立った時、ミチのただならぬ様子に主の清兵衛は、傘狂の添書きを読む前に女中に指図して奥に床の仕度をさせ、医者呼びに走らせた。

清兵衛の手厚い看護のお蔭で五日後には元通り元気を取り戻したものの、用心が肝心と清兵衛はミチの旅立ちを許さなかった。

そうして十日余りも、風通しの良い座敷で庭の木々の葉擦

れを聞き、法師ゼミの声に耳を傾けて過ごした。

必要に迫られて続けている旅ではないが、余りの加護は些か気持ちの負担でもあった。中津川の俳人扇舟に、師傘狂の言伝を渡した後は、木曾の棧(かけはし)で真円の月を見たいと思っている。

そんな思いもあつて明日の朝には出発をしたい、と清兵衛に伝えたところ

「明日から三日間は皆が楽しみに待った年に一度の祭りです。祭りを楽しんでそれからの出発にきなさい」と承知してもらえなかった。

翌朝、店の男衆全員が、裏の井戸で順番にみそぎを行い、白足袋に履き替えて祭りの仕度に出掛けて行った。

出がけに清兵衛が

「午の刻には一旦戻ります。それから祝いの膳を女子供も交え全員で頂いていよいよ祭りです。それまで退屈でしょうが暫く待っていて下さい」と言い、五十を過ぎているとは思えないかくしゃくとした足取りで出かけて行った。

ミチは清兵衛や家族には申し訳無いと思ったが、旅立ちの置き手紙を書いた。

十日に余る看護に礼を述べた後に

「祭りの白足袋が主を待つ如く尼僧の足袋も主を待ち候わば、十日に余る御厚情尚謝し難く仁愛の深きに感佩致し候」と走り書きを残した。

祭りのご馳走作りに余念のない台所のざわめきを横目に、
人気の無くなつた酒蔵を抜けて外に出た。

久し振りの戸外は、僅か十日余りの間に随分季節が進んで
いるようだった。

陽の光にはまだ夏の名残の力強さが残っていたが、肌に触
れる風はさらりと乾いてさわやかだ。

ミチは背後に後ろめたさを感じつつ中津川へ向かった。

扇舟は不在だった。栗菓子を商う店は、赤い襷をかけた女
房と二人の娘が切り盛りをしていた。

前掛けで手を拭き

「今年は祭りの当元なので、主人は神社に行っていますが、
間もなく戻ります」と女房が、傍の縁台に腰を掛けて待つよ
うに言った。

姉と思われる娘が、お茶と栗菓子を盆に乗せて運んで来た。
うでた栗の皮を丁寧に剥き、水飴に漬け込んだものだと言っ
た。鮮やかな黄色はクチナシの実を使っている、と教えた。

店先には、その栗を笹の葉でくるんだものが並べられてい
た。

ひと口噛んで、その香ばしさと甘さに驚いた。濃い目に出
されたお茶との調和が絶妙だった。

口の中に広がる栗とお茶の甘さの競演を楽しんでいると、
ふと、十一年前新潟で蟹の手振り(あまのてぶり)を見ながら
いただいた冷や水の美味しさを思いだした。

あの日の祭りの興奮と冷や水の味は、今でも鮮やかにミチ
の記憶の中に生きている。

ほどなく戻った扇舟は、菊舎の来訪を知ると小躍りするよ
うに喜んだ。

「今夜は近在の美濃派の俳人達が集まる句会が開かれます。
良い折に来杖くださいました。傘狂先生の愛弟子が加わってくれ
るなら、今夜は最高の句会になります。さあさあ、脚絆を解
いて一服したら、早速出かけましょう」とミチの意向など全
く頓着無い様子だった。

扇舟と中津川の俳人達の歓待のお蔭で祭りも手伝う羽目
になり、とうとう三日もの間、杖を止めてしまった。

木曾の棧は立ち待ちの月を見ることに改めて、今は妻籠の
望月を楽しんでいる。

突然隣りの部屋がさわがしくなった。遅くに宿に入った人
のようだった。声の様子から二人連れらしい、それも夫婦の
ようだった。

「福島じゃあれー目にあつたなあ」

「そうさね、お前さんが柄にも無く木曾の棧が見たいなん
ていうからさ。三州街道を歩けば何でもないものを、飛んだ
迷惑さ」

「それにしてもだ、前をはだけて見せるなんて、あの色気
違いめ、とんでもねえババアだぜ、ったく」

「あたしだって子を孕んじやあいないかって下腹はさすられるわ、おっぱいは揉まれるわ、気色悪いたらありやあしない。子を孕んでいようがいまいが、余計なお世話さ」

聞くともなく薄い壁越しの会話を聞いていたミチは飛び上がらんばかりに驚いた。

二、三日先には福島を通るつもりでいる。あの関所は、厳しいとは聞いていたが、そんな調べをするとは想像もしていなかった。

廊下に出たミチは、隣りの部屋に声をかけ詳しい話を聞かせて欲しい、と頼んだ。一目見て町人と分かる二人なのに何を怪しまれたのかを知りたかった。

女改め、というのだそうだ。二人は紛れも無く夫婦だったが、亭主が色白の小柄な所為で、女が変装をして関所を通ろうとしていると疑われたらしい。

「何しろ女が関所を通るのをやたらと警戒してるようだったな。女房は結ってる髪まで解かされて髪の高さを調べられたと言うし、黒子はあるかとか、怪我の傷跡は何処だとか、何だかんだで一刻(二時間)は止められてしまったな。」

「それだけじゃないよ。下帯まで外されて、何を調べるのかと思えば子供を身ごもっちゃいないか、だって。関所を通ると何の関係があるのかしらね。乳が張ってるんじゃないかっておっぱいを揉まれるわ、下腹を撫でられるわ、いくら相手が婆さんでも、そりゃあ気色が悪いつたらなかったよ」

「関もりが言うには、男のなりをしたり、尼に変装する者が多いらしい。おいらのように一日中陽にあたらねえ仕事をして青つ白い上、髭も生えないとなりやあ、そりゃ女と間違われてもしょうがねえけど、前をはだけて一物を見せると言われた時にや驚いた。悪い冗談だと思ったら婆さんが本気だつていいやがる。ニタニタ笑って出しな出して催促さ。ところでお隣さん、見たところ尼さんのようだけど、女改めは大変だと思わず。悪いことは言わねえから別の道を探すことだな」

言われるまでもなかった。話しを聞いている内に、妻籠の宿場に入る直前、飯田方面に向かう道があつたのを思い出していた。

木曾の棧は諦めて飯田から天竜川沿いを登ろう、と決めた。女改めなど冗談ではない！